

浄土

昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
 昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授受承認誌)第三二五号
 昭和四十八年六月二十五日印刷 昭和四十八年七月一日発行



第三十九卷

第七号

1973

7

七 月 号



—目 次—

表紙『地獄の釜』松涛達文画

—源信の『往生要集』より—

教化と福祉……………	秦 隆 真…………	(2)
開宗八百年に聞く(第二回)……………	大 野 法 道…………	(4)
特集 生命(いのち)を考える		
現代人に死はあるか……………	佐 竹 隆 三…………	(9)
いのちとたべもの……………	岡 崎 光 子…………	(13)
念仏・人と歴史⑥ 熊谷次郎直実……………	伊 藤 唯 真…………	(17)
お盆法話 拝む日、通い合う日……………	深 谷 常 玄…………	(20)
選訳集講話⑥ 念仏の利益……………	藤 井 正 雄…………	(22)
霊場をたずねて③粟生野・月寺……………	兼 子 正 真…………	(26)
異僧真覚〈第十七回〉……………	柴 田 六五郎…………	(28)
浄土宗の国宝 『上宮聖徳法王帝説』……………	宇 高 良 哲…………	(32)

教化と福祉

秦 隆 真

(弘教大学教
総本山知恩院顧問会会長)

浄土宗開宗八百年も、日に近づく。今年は宗祖の門下の一人、親鸞上人の生誕八百年と真宗始って七百五十年を迎え、京都を中心に東西本願寺をはじめ、真宗十派をあげて慶讃の催があり、法要を中心に各種大会、記念出版等多様、全国檀信徒も雲集して大変な賑いであったが、その募財から交通・宿舍等の、そして終るまでの苦勞は察するに余りがある。さて今後真宗が現代、将来にかけて如何に対処し、前進するかが大きな課題であらう。

愈々来る四十九年には、浄土宗開宗八百年を迎えるので

ある。宗門を挙げて、総本山、大本山、西山三派にも連絡し、全門末、檀信徒を結集して、意義ある八百年とし、祖師に報恩をせなければならぬ。既に準備は進められ、その態度は整えられていることは、新聞等の報道により周知のことと思う。

教化センターの設置と事業、本山のおてつき運動や文化





無始に身を受けてよりこのかた、つねに十悪をもって衆生に加え、父母に孝せず、三宝を謗り、五逆不善業をつくる。この衆罪の因縁を以て、妄想顛倒して纏縛を生じ、まさに無量生死の苦を受くべし

——往生礼讃・要懺悔——

“自然と心とデッカク遊ぼう”この標語は、某大手デパートの中元セールのキャッチフレーズである。競争激しい商業界にあって、各デパートは消費者の購意欲をさそう、セールスポイントを発表するが、この標語はいつでも時代を先取りするデパートとはいえ、なかなか心にくいものといえよう。

ひとがより良き生活をするためになされたはずの都市開発は、今や自然を破壊するにとどまらず、ひとの生命をも脅かしている。日々伝えられる各地の悲惨なニュースは、いつ我身にふりかかるやも知れない。しかし、私たちは何事によらず、その事実遭遇しない限り、すべて他人事と考えてしまいうのが常なのである。だが、今日のように激しく移り変わる社会にあっては、ただ傍観視しているだけでは、より良き生活は望めないであろう。

そこで今こそ、先の標語ではないが、一度破壊したらもどることのない自然と融和できる生活を、一人一人が心にとどめるべきである。

(S・I)



的、財的資源はどうであらうか。

さて、すべては教化中心である。宗祖に還れとは、祖師開宗の精神を考えよというのであらう。即ち一向専修口称の念仏、人間は仏の前に、上下貧富善惡の差なく、念仏生活の日々こそ幸福である。「現当二世の利益」とは何をさすのか。現在、今日、念仏の力により、お互に幸福をつかむことができる。これが現益であらう。当益とは将来の必得往生である。誠に幸である。

このように、すべての教化運動を福祉に結びつけて欲しいと思う。

国は福祉国家の看板をかかげ、国民は皆福祉を要求している。すべての宗教がこれを見捨てることはできない。

戦前、浄土宗は社会事業宗といわれた時がある。大正十年頃、渡辺・矢吹・長谷川先生達の指導により、社会の变革期、米騒動、関東大震災に対処するため、慈善事業から社会事業を提唱、推進せられたのである。

そこで、浄土宗は卒先して社会事業協会を結成し、一寺院一事業、特に保育事業中心に立ち上ったのである。



浄土宗開宗八百年正當の年を明年に控え、弊会でもその記念慶讃事業を微力ながら少しずつ進めております。本日は、その一端といたしまして、増上寺御法主大野法道先生をお尋ねしてみました。『開宗八百年に聞く』シリーズ第二回ということで、御法主のお考えをお聞きし、また最近のご様子をお伝えしてみました。午後五時少し前、日課の散歩を終えられた御法主が、われわれの待つ増上寺内待室へ、その健やかなお姿をお見せになりました。

開宗八百年に聞く

〈第二回〉

語り手

大野 法道

(大平山増上寺法主・文博)



「南無阿弥陀仏」は心のふる里

——本日はご苦勞さまでございます。大変お元氣そうにお見受けいたしますが——

いや、さすがに力が抜けてしまつて。腰の力が抜けてしまい、立っていても立っている気がしません。年が年だから仕方がないと思うんですが、腰に力が入りません。

——それでも先生は、お身体の上の方はしっかりしていられますから——

いやいや、それも朦朧として来ました。目や耳はまだいいんですが。

——それは結構ですね。いつもは今頃はこうしておられるんですか——

今頃はお風呂に入っていますね。

——今日はもうお済みですか——

いや、これからです。

——それでは、さっそくお話しをお伺いいたしましょう。実は、浄土宗の開宗八百年ということで、『浄土』

の方で企画いたしました色々とお話しをお聞きしているんですが、そういうことで御法主のお考えを少しくお伺いしたいんですが——

まあ、開宗八百年ということの意義云々とは別にいたしまして、念仏は日本人の心に結びついているということですね。「南無阿弥陀仏」ということは日本中に知れ渡っていますよ。例えば、人が亡くなるということですが、寄席や歌舞伎を見てもわかるように、人が亡くなれば必ず「南無阿弥陀仏」ですよ。「南無阿弥陀仏」は人が亡くなるというこの代名詞ですよ。ともかく、浄土の教えは日本の津々浦々にはびこっていて、実際に信仰し

悦目妙善なり
三孤山居士

ているとかいないとかいうことは別として、「南無阿弥陀仏」の救いが日本人にしみ込んでいるんですね。もう

宗派を越えて、人の救い、人が亡くなるということへの救いを、浄土教の大きな立場で考えられていますよ。風習となっています。

——確かにそうですね。「南無妙法蓮華経」とは余りいいですね——

——そうそう（笑い）。

——ただ、「南無阿弥陀仏」の救いということが、すぐ法然上人の教えとは結びつきませんね。そこがわれわれのPR不足というか、それをもう少し徹底して行かなければならないのではないかと思うのですが——

ああ、それは感じますね。そういう意味では、この開宗八百年ですが、こういう機会を利用するということはありますね。法然上人の教えを日本中に知らしめるということですね。

——そうですね。御法主は開宗七百五十年の頃はどうでしたか。御法主のお歳からすると、三十七・八歳の頃です——

正大におりましたね。大正大学で教鞭をとっていましたね。しかし、印象はそれほど深くはないですね。余り

印象に残っておりません。

開八を期に真の念仏信仰を

——どうですか。御法主とされては、この開宗八百年ということをごどのように説かれますかね——

まあ、八百年といっても余りピンとは来ませんがね。

特に八百年という区切りは必要でないんじゃないですか。しかし、法然上人が浄土の教えを説かれ、浄土宗を開かれたという意味は重大です。そういう意味では、一つの区切りの時に何か発奮しようということはありませんね。

——確かに八百年続いて来たということは浄土の教えから見れば、それほど重要なことではないかもしれませんが、人生でいえば、古稀とか米寿とかいうことですから、お祭り騒ぎのお祝いだけで終わらないで、念仏信仰を大いに宣揚する機会としたいものです。また何か後の時代に残るような宗団の活動も期待したいですね——

この本堂の落慶式も来年の開八に結びつけて行なうわけですが、こういう大念仏道場の完成ということで、念仏信仰の発展を大いに期したいものですがね。

素直な信仰こそ長寿の秘訣

——御法主も八十年余の歴史を生きてこられたわけなのですが、こうして法然上人の教えを実践して来られて、今振り返って何かご感慨をお聞かせ願えませんか——

まあ別に感慨ということはいいけれども、結局、人生の帰着は念仏であるということをお教えて下さった人として、法然上人は懐しいですね。法然上人によってお念仏の道がわれわれに与えられたということは、ハッキリしていいからね。

——そういうことと先生のご業績のご学問などとはどういう風に関わっておられるのですか——

別に学問自体とは関係はありませんが、私は若い頃勉強した、そういうことを振り返った時、戒律の学問をしたということですね。ただ、法然上人は戒律を決して忘れなかった人であるということは感じますし、私もそういうことを論文に書いたこともあります。

——ところで、この頃のご生活は専ら念仏三昧ということですか——

ええ、もうそれしか他に何もございません。足腰はふ

らついて来ましたが、お念仏のおかげで何とか長命を保っていますね。

——いや、もうそれが一番ですよ。今度は椎尾先生のお歳まで、いやそれ以上に長生きして下さいよう……、ところで、先生は宗教に全然タッチされなかったのですか——

ええ、これには全然関係しませんでした。

——時間も大分経ちましたが、現代の人々に念仏信仰を教え広めるといふか、そういうことについてお聞きいたしますと——

まあ、やはりじかに念仏をぶつけるということですね。法然上人の教えを色々と妙にいじくったりしない方が、返って念仏の本義に徹した姿勢といえますね。

——いたずらな現代的理解とか解釈などをしないで、法然上人の教えそのものを現代の人々に真剣に伝えて行くということですか——

ええ、そうです。生半可な解釈は邪魔ものだと思いますね。

——確かに、期するところ、法然上人そのものの時代に帰ってみるということですか——

ともかく、念仏の行がまず先にあるということでは

よ。この意味合いは、今の人達が色々考えることもあるかもしれないけど、つねに真理は一つです。

——そういうものを開宗八百年というこの機会を通して、大いにぶつけて行こうということになりますね——
そう、それには自からの実践ということが必要ですね。「自信教人信」という姿勢でやることですね。

施本『おぼん』

価一五円

B6変型・表紙共 一二頁

送料実費・二百部以上一三円

◇おぼんはわたくしたちの心に、なつかしい味いを思っておこさせます。

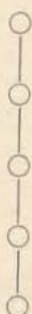
◇とおい昔から、日本に伝えられている行事を通して、人びとの心のうちなる、仏心を育てましょう。

◇おぼんとおせがきについてのやさしい解説の施本としておすすめます。

発行所 法然上人鑽仰会

東京都千代田区飯田橋一―十一―六
電話東京(〇三)二六二―五九四四

——はい。ともかくこの機会に、われわれ自身も確かな実践をいたし、多くの仏教を求める人々に法然上人の教えの真実を伝え示したいものです。大野先生、本日はありがとうございます。



御法主は、「近時足腰が非常に弱くなってしまった」と申されましたが、顔色体調共にきわめて健康とお見受けいたしました。威儀端然として、お話し振るもまことにしっかりとした風でございました。ご内侍の斎藤師から少しくご法主のご生活振りを伺いましたので、以下記しておきます。

御法主は、朝は七時に起きられ、夜は九時にはお休みになられるそうです。そして午後一時から二時までが午睡の時間です。足腰の訓練のために、主治医であられる慈恵医大内科の穂刈博士から「散歩」を勧められ、このところ増上寺裏の三康文化研究所界隈を中心として、一日一回は散歩にお出かけになるそうです。「法主夫人健康手帳(散歩実施記録)」なる一冊のノートが作られ、御法主の散歩記録が克明に記されてありました。ご内侍の方々の暖かな眼に見守られて、盆栽いじりの好きな御法主は健康な日々を送っておられるようです。

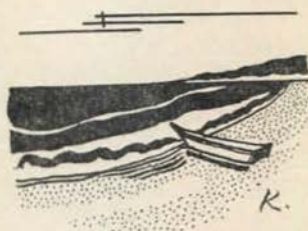
生命（いのち）を考える

現代人に死はあるか

— 病気の人間学的考察を中心として —

佐竹 隆三

（大正大学教授・医学博士入精神医学）



生命の軽視と死に対する無感動は、現代人の精神構造のなかでも、最も注目すべき基本性格のうちの一つであるように思われます。交通事故や不慮の災害で、突発的に、無意味に多くの人が死ぬということは、洋の東西を問わず、また何時の時代でもあったことでありましようが、今日ほど頻回でしかも大規模な形で、偶然的な事故死はなかったと思われま

すが、人が死ぬというよりはむしろ無残にも残されるところと言った方が妥当のようであります。或はまた、日々の新聞やテレビで十代の未婚の母が育てる自信がないとか、面倒だとかという単純な理由で、自分の生んだ子供を殺して捨てるとか、新しい愛人との同棲生活のためには前夫との間にできた子供が邪魔になるといふ、はなはだ自己中心的な利己主義のた

めに子供が犠牲になるなどという報道に接すると、徒らに人間性喪失、非人間化などと歎いてばかりおられないような気がいたします。どうしてこのような状況に至ったのでしょうか。現代では「人間として生きる」・「人間として死ぬ」ということはもはやできなくなったのでしょうか。精神医学者の一人として、「仏との出会い」以来仏教の思想の偉大さに憧憬をもつ仏教徒の一人として、私は私なりにささやかな処方箋を呈示してみたいと考えます。

生物学的に考えますと、有機物は無機物へ解体しようとする傾向があり、生あるものは必ず滅する、すなわち仏教で言う「生者必滅」ということわりは生物学的鉄則でもあります。人間も生物のうちの一つの存在である以上、この理法からまぬがれることができないのは当然で、わたくし達は生まれた瞬間から確実に死へ向って進んでおり、人生とは死への過程であります。「死すべき者」という表現が人間そのものを意味することは理由のないことではありません。しかしながら、知覚（対象意識）のある動物は死の脅威を感じ、危険が迫ると動物は本能的に恐怖を感じ、それから逃避しようと試みます。自我

意識や願望意識をもち知性のある人間は長期に亘って死を恐れ、避けることのできない死を恐れることが不合理であり矛盾であることを充分に知っていないが、しかもなお人間は極度に死を恐れ、死から顔をそむけ、なるべく死については考えないようにするのであります。だが、このような実存のごまかしは、家族や親しい友人などの死や自分が重篤な病気になるということによってもろくも破綻するのであります。死の不安や恐怖から完全にまぬかれることはできません。そしてこのような死の恐怖を克服するために宗教や哲学を生みだしたように思われます。

プラトンは死を靈魂の不死の世界への旅立ちとし、キリスト教は死は精神の肉体からの解放であり、神のそばへの昇天であると考えましたが、このような信念や信仰をもてる人は或は幸福なのかもしれない。しかしながら、自分がこの世から完全に消えてなくなるといふ事実を否定できない人、そして今、此処に生きている自分が死後どうなるかという不安や恐怖を打消すことができない人は一体どうすればよいのでしょうか。

わたくし達は多数の他人の死を見聞し、死というものは避けがたい事実であり、自分もやがていつかは死ぬだろうと考えますが、それは自分自身の経験ではありません。経験しえないという意味で、死はつねに彼岸であります。したがって自我心理学的には自己の死はありえないと言えます。何故ならば、どんなに死に近づいても、死は常に未来にあるものであり、死んだ瞬間には一切の意識現象はなく、知覚し判断する主体そのものが無いのですから自分が死んだことを経験的に知ることは不可能であるからであります。したがって、死は経験に即して言えば非経験的なものであり、観念であり、他人の死を媒介とした対象的な認識であるにすぎません。このように考えてきますと、死というものは実体ではなく、もし死を実体と考えるとしたらそれは人間の錯覚であります。

「自己の死はない」という自我心理学的確信は一応理解できたとしても、それで死の不安や恐怖は消滅するのでしょうか。ゴリーキーの描いた「夜の宿」の売笑婦のように、「いくら苦しくてもよいから、もっと生きたいの」というのが人間の本音のようであ

りまして、たとえどんな苦しみの下におかれても、人間はもっと生きていたいと願うのであります。すなわち、死への恐怖は「生への執着」の裏返しにすぎず、死への恐怖は死の恐怖からの脱却を内意し、死への関心は死からの解脱を希求していると言つてよいであります。生への執着を離れることによつて死の恐怖を克服するという仏教の教えは、この意味では問題の核心を衝いた明快な解答であると思います。

死に急ぐ自殺者は別として、わたくし達は死を一般に考えまいとし、死の問題を避けています。多数の平凡な平均的な正常人がこのような態度をとっているからといって、これが死に対する正しい態度であるか否かは一考を要します。私は医者でありますので、他の職業の方に比較すると、死にゆく人の姿を観察する機会が多く、少くとも死の問題を考察するチャンスに恵まれており、死についての心構えが或る程度できており、死に臨んでそれ程みぐるしい態度をとらないだろうとひそかに自負しております。ところが数年前に胃潰瘍に罹患し癌研付属病院に入院した際に、周囲の患者が胃癌で死んでゆくさ

まをつぶさに観察し、自分も本当は胃癌ではなからうか、主治医にだまされているのではなからうかなどと疑心暗鬼となり、まことに恥しい次第であります。不安と緊張のため一時的に症状が悪化し、癌ノイローゼのような状態になりました。他人の死をあれ程冷静にみつめることができて、自分が死ぬかもしれないという限界状況では、日頃の医師としての心構えも教養も何の役にも立たないことを知った時、己の愚かさとしらなさを今更のように痛感したのであります。この絶望的な情況から私を救ってくれたのは、増谷文雄先生の「仏教概論」であり、すが、それを契機として仏教への傾倒が始まり、「現代人の仏教」十二巻、「仏教の思想」十二巻を読み、仏教に対する誤解や宗教一般に対する偏見は一掃され、「ほとけとの出会い」がおこったわけがあります。それまでの不遜な自然科学者の私は死に、謙虚な人間に生まれかわったという確信をもつことができました。死を主体的な絶対的な問いとして解決するようにと私に迫った胃潰瘍という病氣は、実は神の恩寵のごとく私の慈悲のごとく有難いもので、精神の真の健康へとわたくしを導いてくれ

た妙薬のようなものであります。

病氣は意味のないもの、取除かねばならない欠陥を意味しているのではなく、むしろ一回限りの歴史性をもつ人生の課題に真剣に取組むチャンスを与え、人間はいかに生きるべきかを考えさせるプラスの価値をもつものであります。「症状のないこと」と「健康」とは区別されるべきであり、病氣を単なるマイナスとみなす機械論的な考えは是正するべきで、病氣は新しく人間学的に考察されねばならないと思います。

大都會ではアノニムの死、したがってまたアノニムの生があるだけで、人生そのものがレディ・メードになり、人々はすべて「一様の死」を迎えるようであります。生の機械化は人間存在を物質化・物体化し、現代は死を喪失したと言ってよいであります。

孟蘭盆会を迎えるにあたり、遠い祖先たちの真実の感情がこの形式を通じてかすかによみがえってくる意義を思う時、私は「人間として生きる」、「人間として病む」、「人間として死ぬ」ということができるように、一日々々をよく生きながら、しかも同時

に常に死に処する心構えの用意をつづけなければなら

ないと思うのであります。



いのちとたべもの

— 生きるための記録 —

岡崎 光子

(東京駒込・女子学養大学講師)

私は現在「食べること」に関係した仕事についているので、人間の生命を維持するに重要な要素の一つである食べることから、今回のテーマについて思いついたことを、少し述べてみたいと思う。

最近、しばしば新聞、雑誌に子供を捨てたり、殺したりする記事を目にする。実の母親でありながら、我が子を捨て、或いは殺すという行為は、普通の精神状態の場合には考えられない行為である。つい二三日前の新聞にも、こんな記事が載っていた。

三十代のある母親が、十二歳を頭に七人の子供を

持ち、そして現在も妊娠中である。夫の収入は月収約十万円程であるが、これだけではとても親子の生活を支えていくには足りない。自分も以前はパー等に勤め、いくばくかの収入を得ていたが、最近はお働かないため、夫の収入のみで家族九人の生活をまかっていたが、そのため子供達に満足な食物を食べさせられない状態にあったという。こんな折、一番末の一歳になる子供の変調に気づいたが、医者に診せるための金もなく、ついに病院に行くことなく、その子供は不幸にも亡くなってしまったという。

かもその死因は、現在の日本の食生活状況からは、とても想像もつかない程重症な、栄養失調であったという。(子供の身体は無惨にも骨と皮のみであった。)

この記事を読み、私はただただ呆然とするのみであった。何故に……それ程になる迄子供を放っておいたのか、母親の無知のために、子供に食べさせる食物を買うことができなかったために、そして子供がすでに食、べる、こともできない位、体力がなくなってしまったために、等その諸原因が考えられよう。

人間この世に生きてきた以上、当然生きる権利と義務を持つてゐるはずである。そのために食、べる、という、生きるための最低の条件は誰れにも確保されるべきであろう。しかも最近、世の中に食物があふれんばかりにあるというのに。(ただし、世界的趨勢では食糧飢饉がすでに起りつつあり、日本でもそう遠くなく食糧難が来るといわれているが……) 一人の将来への可能性を充分に持っている尊い生命が、人間としての最低の条件さえも守られずして消えたこの事実は、実に悲惨なことである。一方には

食べすぎ、飲みすぎによる結果、疾病を誘発し、自分で自分の食事管理、健康管理もできず、医師や栄養士の力にたよって生きている人間も存在するといふのに、!

我々人間が、人間として生きることが、単にヒトとして生物的に存在するのみならず、社会的に存在することにより、その価値があるはずであろう。すなわち、鳥や獣では、親は子供の生命を守るため、せつせとエサを探し求め子供に与える。人間がこれらと違う点は、単に存在している動物、植物を食物として食、べるのみでなく、食物を作り出して食、べる、ことができること、及びほしいと思う食物を必要な量、買い求めることができることである。

しかし、無限定に好きな食物を、欲しいだけ食、べることに問題はあつた。人間が食、べる、ということは、第一に生命を保守するため、第二に活動、運動、仕事を、するため、第三に成長していくためである。

ではどんな食物を、どの位食、べたらよいのだろうか。その示唆を与えるものの例として、食品構成が挙げられる。またどんな栄養素を、どの位とつたら

よいかを知る一つの手がかりとして、栄養所要量なるものが与えられる。しかし、これらの量は一応の目安であって、必ずしもこれらの量に見合う食物量、栄養量をとらなければいけないというものではない。

人間一人一人、性格が違いうように、一人一人が必要とする食物の種類、量は当然違うはずであるから、各自が自分に合った食物の適量を知り、食べることが望ましいことになる。だが一人一人の適量を決めることは、現実には非常に難しいために、食品構成、栄養所要量のような目安量が発表されているわけである。

生命を維持するために必要な熱量素、血や肉となるために必要なたん白質、身体の中の肝臓器が円滑に機能をはたすために、また身体の調子を整えるに必要なビタミン、ミネラル類等の諸栄養素を、我々は食物から得るわけである。これらの諸栄養素を、全て同程度含んでいる食物はほとんど存在しない。例えば油は脂肪を沢山含み、たん白質はほとんど含んでいないように。

そこで我々は、ある特定の食物を偏ることなく、

いくつかの食物を組み合せて食べることが必要になるのである。しかし我々が毎日食物を食べるということは、ただ栄養素を得るためにのみではないはずである。食べることが栄養素を得る目的のみであるなら、いくつかの栄養素を混合させた丸薬をのんで食事の代りとすることができが、我々はこれでは満足を得られない。

食べることは、食物から栄養素を得ることには違いないが、更にプラスアルファを我々は食物に求めている。すなわち、時には楽しみとして、時には親と子の団欒の媒介物として、時にはうさ晴らしの対象物となり得るもの、これが食物であろう。こうした食物を毎日食べることは、この世に生を受けた人間の生きることの権利と共に与えられていることなのである。これはどんなに小さな子供にも、不幸にして自分で自分の生活を支えられない障害児者にも確保されるべきである。

過日、ある重症障害児を収容している施設の栄養士から、こんな話を聞いた。

A君（十二歳）は生れて間もなく脳性マヒにかか

り、いわゆる障害児になってしまった。十二歳になる今日まで、不幸にも施設に収容されず、母親がA君の世話をしてきたのであるが、現在の体位は幼児なみである。こんな彼でも生きるための、人間としての権利は主張するという。どんな形で？ それは食べることに關してであった。彼の今までの食生活は、市販の乳酸飲料（一本五十cc）を一日四十本、それに母親の手で炊かれ茶碗によそられたごはん醬油、味の素、卵をかけたものであった。これがA君の一日の食物の全てであったので、彼の身体は充分に發育せず幼児なみなのである。

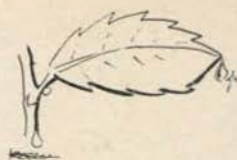
そこで栄養士が施設に収容させた時点から、A君に他の食物を食べさせようと努力したが、全然受けつけない。しかたなく乳酸飲料と卵ごはんの食事にしたが、乳酸飲料は飲んで、ごはんは一口も食べなかったという。A君は母親の調査した醬油と味の素と卵との分量の味を覚え、少しでも割合割合の違

うものは敏感にも感じとり、受けつけなくなっていたというわけである。A君は人間として存在する価値を、食べることに見出していたのである。

このことは、人間はいかなる状態にあっても、この世に生を受けたからには、生きる権利を与えられ、少くとも自分で自分の生命を守るために、努力しなければいけないことを示唆している。

生れたばかりの赤ちゃんでさえ、一生懸命お母さんの乳房に吸いつき、生命力の強さ、偉大さを示している。ましてや我々大人は、自分の食事管理、健康管理をすることは当然のことであり、より積極的に生きることにはたち向うべきである。同じ人生を歩むなら、前進的に、活動的に生きていくべきであろう。そのためには休養や適切な運動も必要であるが、やはり栄養、すなわち食物を必要量かつ充分量を補なうことは、より重要なことである。

生命（いのち）を考える



法然上人をめぐる人びと(六)

念仏人と歴史

—熊谷次郎直実—

伊藤 唯真

(仏教大学助教授)

上人も、信心堅固なる念仏の行者のためしには、常におもひ出給て、「坂東の阿みだほとけ」とぞ仰られける。

『勅修御伝』二七

武士は鎌倉時代という新世紀の開拓者であったが、執敵怨類に会っては瞋恚のほむらを燃やし、人畜のいのちを断つては罪惡をほしいままにする「造惡の機(人間)」であった。この惡人たる武士に救済の手をさしのべたのが法然上人である。「弓箭の家業をもすてず、往生の素意をもとむる道」は専修念仏のほかになかったから、武士の間でこの「機と教の相応せる法門」浄土宗に帰依する者があいついだ。

関東御家人(鎌倉幕府の將軍の家臣)のなかにも、大番役(宮廷の警固)などで上洛して法然上人に接し、熱心な専修

念仏者となるものが出た。たとえば上野國の御家人では大胡おおこの小四郎隆義、薩田さだの太郎成家、下野國の御家人では宇津宮うづみやの弥三郎頼綱、武藏國の御家人では甘糟かんそうの太郎忠綱、熊谷の次郎直実、津の戸の三郎為守などである。彼らの信仰の影響は子息、一族郎党にまで及んだ。大胡の小四郎隆義の子息太郎実秀およびその妻室も上人から消息による教化を得て浄土信仰に生きた人であった。大胡太郎、津戸三郎は「上人根本の弟子」とさえ云われている。

関東地方の念仏弘通にこれら在地領主たる御家人が果たした役割は大きく、法然上人もかれらに大きな期待を寄せられていた。津戸三郎が熊谷直実の支援もあって、武藏国内で念仏者を三十人以上もつくったときには、法然上人は書状をつか

わし、「さて専修念仏の人はよにありがたき事にて候に、その一国に三十余人まで候はんこそ、まめやかにあはれに候へ（略）ひとへに御ちから、又くまかやの入道なんどののはからひにてこそ候なれ」と、専修念仏の興隆をよろこび、その労を稿っておられる。

法然上人が直接勸化し、その内容がはっきりしている教化の対象者は、特定の僧侶貴族を除けば、実は関東御家人やその出身者なのである。法然上人と武士との関係は、貴族などよりもはるかに密接であった。法然上人をとりまく数多い武士のなかで、また右にあげた関東御家人のなかでも、門弟としての第一人者はなんといっても熊谷次郎直実であろう。そこで熊谷直実に焦点をあててみよう。

直実は、永治元年（一一四一）武蔵国大里郡熊谷郷に生まれた。法然上人より九歳若かった。早く父と死別し、おじの久下直光に養われた。剛勇の聞えがあり、平家の全盛時代に、直光に代わって京都大番役をつとめたが、傍輩に侮辱されて代役をこわり、平知盛に仕えた。直光はこれを心よく思わず、後年このことがもとで両者の対立となり、はては所領争いともなつて、直実が隠退することにもなつたのである。源頼朝が挙兵したとき、彼は郷里に下向しており、石橋山の合戦には平家方として従軍した。しかし間もなく頼朝方

に加わり、治承四年（一一八〇）十一月の常陸の佐竹秀義攻めには手柄をたて、養和二年（一一八二）五月、熊谷郷の地頭となった。寿永三年（一一八四）二月、一の谷の合戦で平教盛を斬ったことはよく知られている。このうち幕府に出仕することが多くなつたが、宮仕えは不得手であつた。文治三年（一一八七）八月、鶴岡八幡宮放生会で行なわれた流鏑馬（騎射の一種）で的立ての役を割当てられたが、射手が騎馬で的立てが歩行であるのにこだわつて頼朝の命を聞かず、所役過怠の罪で領地を削られた。この頃、五十歳の半ばに達した法然上人は大原問答で名を挙げ、専修念仏の積極的な布教がはじめられようとしていた。

法然上人が兼実公に招かれてその邸に出入りしていた建久三年（一一九二）は、直実にとって生涯最大の転機の間であつた。この年十一月二十五日、直実は頼朝から直接、直光との所領界相論について尋問を受けた。直実はこの席上、梶原景時が直光をかばつたのをのしり、頼朝の下した不利な判決を不当として『吾妻鏡』によれば自ら刀で髪を断ち、そのまま出奔したという。しかし『熊谷家文書』によればこのときすでに「地頭僧蓮生」と号しているから、出家したのはこの裁判が直接の原因ではなかつた。出家の原因はやはり教盛を討つたことであらう。しかし、私宅に帰らず上京して法然

上人の門下に入った直接のきっかけはこの裁判にあった。

手足をも切り命をすててこそ後世は助かるものと思つていた直実は、聖覚の手引で法然上人に初めて出会つたとき「罪の輕重をいはず、ただ念仏だにも申せば往生するなり。別の様なし」と教えらたて感泣した。建久五年（一一九四）彼は鎌倉に来て頼朝に仏道、兵法を語り、そのまま留まるよう懇請した頼朝をふりきつて帰京した。直実は性格が剛直であるだけに、一端信仰の火が点じられるや、その宗教的実践も熱烈で、「ふた心なき専修の行者」となつた。

そして、念仏往生の信心決定してからは、ひとえに上品上生の往生の望みを持つた。元久元年（一二〇四）五月十三日、彼は鳥羽において、上品上生の来迎の阿弥陀仏の前で上品上生往生の願を立てた。この立願のことを述べた直実自筆の置文は今現に嵯峨の清涼寺に伝えられている。それによると蓮生は、われらが身にとつては下品下生でも限らない楽しみであるが、上品上生以外の往生では再びこの土に生まれて衆生を極楽に導くことはできないとされている、法然上人が末代の衆生で上品上生する者は一人もないと仰有つてゐるのをよく知つてゐるが、弥陀の本願、三部経の文、善導の釈がある以上、同じことなら自分は上品上生を果して有縁はもとより無縁の者までも浄土に迎えたい、と立願している。直実が上

品上生を願つたのは、死後再びこの土に生まれて念仏の悦びを有縁無縁の者に拡げ、一切の人を浄土に導こうとする志が強固なためであつた。

直実は上品上生を願うあまり、専修念仏から逸脱した行業に走る懸念があつた。しかし法然上人から「迎接曼荼羅は大切におはしまし候、それも次の事に候、ただ念仏を三万もしは五万もしは六万、一心に申させおはしまし候はむぞ、決定往生の行ひにては候、こと（異）善根は念仏のいとまあらばの事に候」と、あくまで念仏を往生業の中心に据えるべきことを諭され、ますます念仏に勵んで靈夢や奇瑞を感ずることであつて、往生疑いなき確信を深めた。

直実は死期を予告した。幕府顧問の大江広元はこれを聞いて、権化の言だ、仰いで信ずべきだと云つた。予告通り彼は、承元二年（一二〇八）九月十四日、東山草庵の法然上人が描かれた本尊の迎接曼荼羅の前で高声に念仏して往生した。上人に先立つこと三年半であつた。上人は信心堅固な念仏者の手本として常に直実を思い出され、彼を「坂東の阿弥陀ほとけ」だと仰せになつてゐた。その上人は、彼がなくなつたとき、四国配流にひきついで勝尾寺に籠つておられた。直実の往生の様子は一ヶ月後、東平太重胤から將軍実朝にも報ぜられた。

お盆法話



拝む日、通い合う日

深谷常玄

(總本山知恩院布教師)

生きている時はさほど思わなかった親のこと、先立った夫よ、妻よ、今いづこ、かわいいわが子よ、なぜ死んだ、あの痛ましい事故さえなければ、お盆はなくなった人を思い出す日である。お盆は亡き人と生ける人と魂の通い合う日である。お盆はたまらなく胸の痛む日である、お盆は生きている事の有り難さのわかる日である、お盆は家中みんなそろって拝む日である。

またお盆がやってきました。お正月、おぼん、ひが、この三つは暦のある限り、いかに時代、世相が変わろうと、日本人の生活と切り離すことのできない行事であります。だが今の若い世代の人達はこのお盆の行事をどう受けとっているでしょう。大方の若い人は死んだら、それまでよと割り切っています。がそれは世間知らずの無信論者の言い方です。無信の人を朽木頑石と善導大師は言っておられますが、木石でない限り、亡き人を出し、胸の痛むのを覚えるのは人情の常です。殊に合掌し念仏する事のできる人には亡き人と生ける人との魂の通い合いをしみじみ味う日がこのお盆なのです。

お盆の行事は古く釈尊の在世の時、十大弟子の一人目蓮尊者が神通力を以て、なくなられた母の在処を求められたところ、食欲の罪のため餓鬼道に堕ちて苦しんでおられるのを悲しみ、釈尊に抜苦与樂の法を求められた時に毎年七月十五日安居が終った時、衆僧を供養し、物を施し三宝を敬まえば、現世の父母はよく寿命を保ち、過去七世の父母は餓鬼道の苦をまぬかれると教えられ、そのお示しに従い、供養したところ、忽ち母は苦患を免れた故事によるものです。

私はお盆のくる度に、親心の篤かった目蓮尊者に強うたれるのです。現代は親不孝時代と言われています。生きている時にさんざん親を泣かせ、親死す時に手一つ合せもせず、遺産の事で争うなどの不孝者の多いこの頃に、親を思い、亡き人をしのぶお盆の行事はまことに意義深いものと思います。

「人間とは何か」と昔からよく言われますが、生と死の間を人間と言うとも言われています。この生とは何でしょう。よく自分の生命だと言う人がありますが、自分で生れてきた人は一人もありません。親の生命の分身です。その親の生命は祖先の生命の分身なのです。親から

祖先へと生命の本源をさかのぼれば限りない大生命の分身なのです。この大生命を仏教では無量寿と言ひ、それを阿彌陀仏とよび奉るのです。阿彌陀仏のみ生命を祖先親を通じてこの世にうけているのが私なのです。この故に生命貴しとするのです。

死とは何でしょう。生命の終りを死と言うとされています。終末です。断絶です。暗黒の苦界への落ちてゆく事とされています。何と言う哀れな考え方でしょう。信仰ある者にとって死は決して、断絶、暗黒の世界への転落ではないのです。仏に帰命する者はわが生命を親へ、祖先へ、み仏へ歸す事なのです。死は全く自然の姿であり、当然の事であると共に、魂の故里本国へ歸れる喜びともなるのです。お盆こそ、この生死の大問題をみつめる、こよなき日なのです。

み仏は生命なり、限りあり、いつはてんこの世にて、み名を唱うるその時は永遠の生命のみ仏のみ胸にいだかる喜びにひたすらに唱えまっつらん南無阿彌陀仏

選擇集講義

〈第六回〉

念仏の利益

藤井 正雄

(大正大学助教授)



(一)

第五章は「念仏利益の文」という章題のもとに、念仏者のうける利益について説かれた文である。

はじめに『無量寿経』と『往生礼讃』が引かれている。

「仏、弥勒に語けたまは、それかの仏の名号を聞くことと得ることありて、歡喜踊躍し、ないし一念せんに。まさに知るべし、この人は大利を得たりとす。則ち、これ無上の功徳を具足す」(『無量寿経』下)

「それかの弥陀仏の名号を聞くことと得ることありて、歡喜し、念に至りて、皆彼に生ずることを得べし」(『往生

礼讃』)

この二つの引用文について私積が以下行なわれることになる。

すなわち、前章では、浄土に往生を願うものの機類を上中下の三類(三輩)に分けたが、この三輩は仏道修行の上で機根および修行の優劣を基準に分類を行なったものである。ここで、念仏をふまえて三輩を再分類して、二つの意味に分けて考えてみると、一つは觀念の浅深、いま一つは念仏の多少による分類となる。

しかし、ここにおいても人々の力量の差についていつているにすぎない。前章で三輩の区別を説いても別に諸

行を讀えず、ただ念仏の一行を選んで讃嘆しているのをうけて、この章に入ってはじめて「一念」をもって、無上の功德が得られるという念仏の「大利」が説かれていることを知るべきである。菩提心などの諸行は小利であるのに対して念仏をもって無上とすることから大利というのである。

ここに、往生を願ひ求める者は、小利の余行をやめて、ひたすら無上の功德の得られる念仏を修すことがすすめられるのである。

このようにして、この章では余行は有上の小利にあるのに対して念仏は無上の功德が得られることを述べたものであり、具体的に利益の内容については触れられてはいない。念仏者の受ける現世利益を滅罪・護念・見仏・延年転寿などと具体的にその内容が述べられるのは十五章をまたなくてはならない。

(11)

利益というばあい、現益と当益とがある。現益とは現世に受くる利益であり、当益とは来世において受くべき

利益をいうのである。熟して現当二世の利益といわれるものである。

法華經葉草論品第五に「是の諸の衆生、是の法を聞き已つて、現世安穩にして後に善処に生じ、道を以て樂を受け、亦法を聞くことを得」とあり、ここでは「現世安穩」が現益、「後生善処」が当益にあたる。現益は現生益、現世利益ともいう。神仏から受ける靈驗のことを利生と呼ぶこともあるが、一般に広く用いられているのは現世利益という言葉である。

本章でいう念仏の利益という利益とは、いうまでもなく現当二世の利益のことである。上人は「生けらば念仏の功つもり、しなば浄土へまいりなん。とてもかくても此身には、思いわづらふ事ぞなきと思ねれば死生ともに思いわづひなし」(つねに仰せられる御詞)と歌われている通りである。

一般的にいつて、經典は伝承的な区分に従えば、序・正・流に三分される。「序分」とは經の緣起を語り、説かんとする教説に対して尊重の念を起こさせる正宗分に至るまでの前序で、「正宗分」でその經において説かんとする經の核心を叙し、「流通分」は正宗分における教説を流布せしめるために、その功德、諸天の加護をとく

に叙すのが典型のパターンである。

このような經典構造のなかで現世利益が説かれるのは、流通分においてである。いいかえれば、經の中心は正宗分であり、利益はその流通のために説かれるのであるから、現世利益の經典に占める位置づけは附屬的なものとなる。したがって、現世利益のもたらされる手順は、正常分に説く仏法を信じ、読誦し、受持し、讚歎供養し、仏法をこの身において実践することによって附屬的に与えられるものであり、一言でいえば「不求自得」すなわち、仏法を信じ、行ずるなかに求めずしておのずから得られるものである。

安国除災致福をもたらす代表的經典は、世に護国三部經といわれる「金光明經」、「仁王經」、「法華經」で、いずれの經典においても、流通分において説かれている利益文は、人間の奥底に秘む感性的欲求をくすぐるような表現がとられていることがおおいので、利益文だけを全体の經典構造を無視して部分的にとりあげると、仏教の基本的立場を無視してしまうことになり、勝手な解釈に走って仏教の本意を見失うことになってしまう。

(三)

このことは、單に經典についてではなく、念仏そのもののあり方についてもいえることである。本章において説かれている念仏の利益の文も、單独にこの事だけとりだしては間違いであり、第一章からの手順をふんで読まなくてはならないとともに、ただ單に現世利益だけを考へてはならないのである。往生を願って、ひたすら阿彌陀仏の本願を信じて念仏申すなかに、「生けらば念仏の功つもり」(現世利益)―日々の生活が彌陀の光明に包まれて明るい、正しい、和やかな生活が送られ、「しなば浄土へまいりなん」(当益)―命終の時には彌陀の来迎によって浄土に往生させて戴くほかにはないのである。

(四)

このことは上人が堂上方の女房たちとの問答を集めた『百四十五箇条問答』で次のように述べられているなかにはっきりとあらわされている。

現世をいのり候に、しるしの候はぬ人はいかに候ぞ。
答。現世をいのるに、しるしなしと申事、仏の御そらことに候はず、かが心の説のごとくせぬによりて、

しるしなき事は候也。さればよくするにはみなしるしは候也。観音を念ずるにも、一心にすればしるし候。もし一心なければしるし候はず。むかしの縁あつき人は、定業すらなを転ず、むかしもいまも縁あさき人は、ちりばかりものくるしみにだにもしるしなしと申て候也。仏をうらみおほしめすべからず。ただこの世、のちの世のために仏につかへむには、心をいたし、ま事を上げむ事、この世をおもふ事かなひ、のちの世も浄土にむまるる事にて候也。しるしなくば、わか心をはづべし。

とくに傍点をしるした文は、念仏の一行は現当二世の利益——本章でいう「大利」をよく語っているとみることができる。

『浄土宗略抄』にも、

弥陀の本願をふかく信じて、念仏して往生を願ふ人をは、弥陀仏よりはしめたてまつりて、十方の諸仏菩薩、観音勢至、無数の菩薩、この人を圍繞して、行住坐臥、ひるよるをきらはず、かげのごとくそいて、もろもろの懊悩をなす、悪鬼惡神のたよりをは

らひのぞき給ひて、現世にはよこさまなるわづらひなく安穩にして、命終の時は極楽世界へむかへ給ふや。

傍点をつけた文に注目すれば、上人の立場が一層明確なものとなるだろう。つづいて

「されば念仏を信じて往生をねかふ人、ことさらに悪魔をはらはんために、よろづのほとけかみにいのりもし、つつしみをとする事は、なじかはあるべき」

と、現世利益をねがって、いわば手段としての祈りを無用とし、さらに

「いのるによりてやまひもやみ、いのちものふる事あらは、たれかは一人としてやみしぬる人あらん」

と語調を強めて否定されているのである。

(五)

ここで今一度、本章の結びの文を味ってみよう。

しからばもろもろの往生を願ひ求めむ人、何ぞ無上大利の念仏を廃して、あながちに有上小利の余行を修せむや。

よくよく味読したいものである。

靈場を訪ねて(三)

第十六番札所 粟生 光明寺

兼子 正 真

粟生の光明寺は洛西粟生の広谷、静寂ななかにも、長い歴史を秘めながら雄々しく建っていた。

弥生、三月も末の昼過ぎ、私はこの粟生の光明寺を訪ねた。陽光のうららかに、ふくらみかけた桜のつぼみに、春の季節に充たされた自分を覚えたのである。

境内に入ると、まず目につくのは、総門の手前、"浄土根元地"の石標である。その碑文にこそ法然上人霊場のなかでも、極めて重要な意味を窺ったのである。そして、上人の御教えもここに始まるかと、しばらくは足をとどめた。

承安五年(一一七五)、法然上人は、浄土宗開宗後、はじめてこの地で専修念仏の道を説かれたのである。この念仏勧進をもってこそ浄土立教開宗のはじめともいふべき霊地なのである。

寺伝には、熊谷次郎

直実(蓮生房)建久九

年(一一九八)の創建、

すなわち法然上人の開

山といまに伝える。実

に七百八十余年の長

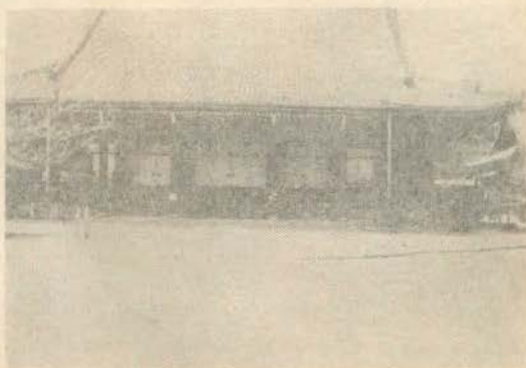
い歴史が、専修念仏口称の誓とともに、ここ粟生の光明寺に

は刻まれているのである。それは、専修念仏に人心の求めて

尽きぬ姿を彷彿とさせる。

高麗門風の総門をくぐりぬけ、ゆるやかな石段を登る。両側に鬱蒼とした木立が茂って映える。新緑の頃はいかばかりかと想像もされる。石段を登りつめたところ、すなわち、正面には、十八間四面の御影堂、屋根の瓦も美しい。あたりに

=光明寺本堂=



は、寂としてなお人の心に安らぎを与えてくれる、何かそうしか表現できないものが漂っていた。

御影堂内陣に入ると、その感じは一層強い。正面に、張子の法然上人の坐像、左手脇檀に蓮生房証空の像が安置されている。

ひとあたり、御影堂の中を見て、外に出た。

そして、御影堂前の庭の良の角に「円光大師御石棺」の石標を見、それに近づいた。

法然上人が建暦二年（一二二二）、八十歳で御入滅され、十六年の後、やっと御遺骸をここ光明寺に安置した時の石棺がこれなのか。

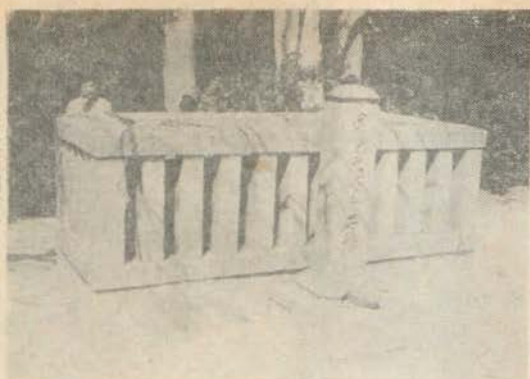
東山大谷吉水（京都市東山区）の地で往生された上人の御遺骸は、南都（奈良）北嶺（比叡山）の勢、念仏迫害

は止むところを知らず、ために安らぐことを能わず、嵯峨から太秦・広隆寺と京の町を転々としなければならなかった。ようやく、安貞二年（一二二八）になってここ粟生の光明寺へ移されたのである。この石棺には、法然上人滅後の厳しい専修念仏迫害の歴史が秘められている。この厳しい迫害の歴史を思うとき、法然門下の挙って専修念仏に青春をかけ、求道の境涯を送った多くの門弟、門徒の姿を考え、我が身の精進を誓わずにはいられなかった。

そう思いをめぐらしながら、阿弥陀堂から御本廟へと回った。この御本廟は、安貞二年正月二十五日、多数の門弟が、石棺より御遺骸を出し、茶火に附し、芳骨の一部と灰で五重の塔を作り、その下に青瓶におさめられたご芳骨が奉安されている。

日も西に傾きかけた頃、法然上人の火葬の跡を見、私はこの粟生の光明寺の石段をおりていった。

おりてゆく途中、現代の寺院が、観光の嵐の中で、その本領を発揮できずに、観光のみに力を傾けることの多い中、この粟生の光明寺には、まだ何かしら、私の心に強く働きかけるものがあると考えた。それが今日を生きる我々にとって、大なる力となることを願いつつ、夕日を背に、光明寺をあとに一路帰途についた。



円光大師御石棺



異僧眞覺 第十七回

柴田六五郎

(滋賀県近江八幡市在住)

石山寺の門前で合掌瞑目して般若心経を誦する眞覺の脳裏に、本尊如意輪観音の姿が鮮かに浮んだが、それは忽ち妙春の姿に変わった。

「魔事だ、魔事だ。いや、俺の妄念だ」

と素早く妄想を打ち消した彼は、合掌を解くと脚を速めた。

立木山観音堂の椽に仮眠し、宇治を指す山裾の道を瀬田の急流に副って下る脚は重かった。外畑を過ぎ、曾束の部落に差しかったのは翌る日の夕暮れである。

「和尚さん、和尚さん」

川岸から急いで上って来る一人の男に呼びとめられ

た。投網を抱えてはいるが百姓風のその男は、「何処の和尚さんか知らんが、一寸相談にのって下さらんか。此処ではなんだ、俺の家へ」

辺りをはばかる風で先に立った。作平と名乗るその男の家は、傍の大榎に覆われてもうすっかり暗くなっていた。男は先刻から大事そうに抱えていた投網をそとと板の間に置くと灯芯に火をつけた。

「実は和尚さん……恐しいこつてす。いや恐しいとも不思議とも訳が解らんじやが。あれは春の彼岸すぎだが、俺の投網に美しい尼さんの水死人が掛りましてな」

「何？ 尼の水死人？」

真覚はドキリとした。

「そうですわ。年は二十才位かな。そうもう美しい、まるで観音様のような」

「そ、それでどうした?」

彼は急ぎ込んで尋いた。

「いや、それがあんまり美しい而も素っ裸の水死人で、俺はつい変な気を起し、役人にも誰にも知らせずに山の畑に葬りましたが……まあそれはそれでよいのじゃが」



天ヶ瀬ダムのために水没した曾木の並木

そう言いつつ男は網を上げた。中から現れたのは紛れもない妙春の裸像である。彼が川に投げた像である。

「ウワッ!!」

と声をあげた彼は、みるみる真っ蒼になった。その顔を覗き込んだ作平は、

「うん? 和尚さん。あんた此の尼さんを知ってなさるな?」

今更隠す術も無い彼は黙って肯いた。

(まさかあの夜京へ帰ると見せて水に入ろうとは。しかしそう云えば妙春の言葉の節々に思い当るものがあった。どうして俺はそれに気付かなかったのか) 自分の迂闊さを悔み、妙春の心情を思つて彼は胸を掻きむしった。その思いの底から、自分だけしか知らぬ筈の妙春の裸を見た此の男に対する嫉妬がむらむらと沸いて来た。

「実は俺がああのを殺したのだ」

と彼は言った。

「ええっ! 和尚さんが? いや、あの水死人には首を絞めた痕も、切られた傷も無かった」

「いや。直かに手をかけて殺した訳ではないが」

「ふん。よっぽど深い関係がありなすったな」

「深い関係? うん、そうだ深い関係だ」

「いや坊さんであらうと無からうと、人間一生の中には色々の事がありますわい。殊に和尚さんのように若い時にはな……しかし俺がその尼さんの木像迄拾い上げようとはほんまによくよくの因縁ですわい。そこへ又あんたが来合せようとは……恐しいもんですのう」

「うん恐しい。全く恐ろしい事だ」
真覚は合槌を打った。

「さっき、尼さんに瓜二つの此の木像を拾い上げた処へ和尚さんが通り掛ったので思わず声を掛けたのじゃが。木で彫ったもの故、割って然そうが打ち捨てようがどうという事はあるまいが、先刻言うたように俺はこの水死人を葬っている。これを見た途端、あの尼さんが俺に祠ほくらって欲しさに姿を現したように思つた。祠るとすれば彼所そこしか無いが。うっかり祠ほくらたら俺は人に怪しまれるかも知れぬ。それから足がついて、尼さんの死体を勝手に葬つたと知れたらどんな咎めをうけるやら。咄嗟の思案をつけ兼ねている処へ和尚さんが通りかかったと云う訳ですわい」

既に用なき物、むしろ邪魔な存在として投げ捨てた像ではあるが、今は此の世に亡い妙春の像たまと思えば一入切実なものか感じられて返答に窮した。

「どうも早急には思案がつかぬ」

「まあそう急がんでもええ。もう日も暮れたし、今夜は此処で泊りなされ。俺は独り暮しで何のもてなしも出来ぬが、此の尼さんに」

と、彼は側に立てた妙春の像をチャリと見上げて、

「引かれた因縁で逢うた貴方あなたと俺じゃ。まあゆっくりして下され」

「では泊めて貰おう。しかし俺はどうもお前さんに迷惑ばかりかけているようで申し訳ないことだ」

「何の、そもそも俺の物好きから斯んな掛り合いになつたまでのこと、迷惑などとは思つておりませぬ。ところで腹が空いたわい。一寸待つて貰て、飯を飲きますでな」
馴れた手付で夕餉の準備をする作平を待ち乍ら、彼は妙春との出合いから今に至る道程を夢見るように想い返していた。

飯をもつて来た作平は、

「和尚さん此の木像の処置じゃ、何ぞ思案がついたかな？」

「今考えついたが、その埋めた場所へ小さな掘立小舎でもよい堂を作つて祠ほくらつて下され」

そう言いつつ真覚は胴巻から布の財布を取り出すと、

二兩の金を作平の前に丁寧に置いた。

「少ないがこれで」

「そんなものは要らぬが、人に問われた時じゃ、困るのは」

「この像を拾い上げた時偶々通り合せた坊主の依頼と言
うてくれればよい」

「うん、なる程。しかしこの裸のままでは」

「なに、心配要らぬ。俺のこの衣を脱いでゆこう。これ
を着せて観音様と云うことにして」

彼は着物を取り違えたあの夜の情景を思い浮かべた。

「それならばよからう。いや承知した。やっぱり和尚さ
んに声をかけてよかったわい」

「俺こそ呼び止められて有難いことじゃ」

二人は初めて声を立てて笑った。

夏の陽に干しあげた川魚を焙りながら作平は、

「やもめ暮しの女房は此奴で」

と濁酒を注いだ。真覚は始めて飲む濁酒に、あいもな
く酔った。作平は陽に焼けた顔を意々赤黒く光らせて妙
春の裸像を見上げた。

「しかし和尚さん。此れは一体誰が彫ったものじゃろ
な。顔立ちも髭つきも寸分違はぬが」

作平の言葉に、今度ははつきり嫉妬を感じた真覚は、

「俺だ。俺が彫ったのだ」

「えっ！ 和尚さんが？ まさか？」

「いや俺だ。随分と苦労した。だが仔細あって川へ捨て
たのだ」

「へえ！ そいつは又驚いた。随分と丹精込めた彫り物
を、而も手前の好きな尼さんの像をむざむざ捨てるな
ど、俺やまるで見当がつかぬわい」

言うまいと思う心を押し退けるように、酒の酔いが真
覚を饒舌にした。彼は経緯を語った。或る意味での共犯
者の意識が、それを言わせたのかも知れぬ。作平はまじ
まじと彼の顔を眺めたがその眼にはアリアリと羨望の色
が浮んだ。真覚は此の時、生れて始めて優越感とも言う
べきものを感じた。

「こいつはどうも。貴方は果報者じゃの。こんな美しい
尼さんを独り占めにして、何も彼も味わいつくして」

「いや、味わたたのではない。只の夢だ」

「夢にしても結構な話じゃ。俺など此の歳になっても女
は知らぬ。女というものは何となく恐しうて叶わん。が
此の尼さんの死体を見た時には、ほんまの話、見ただけ
で体が震えた。じゃがその震えは恐しさとは違うた。何
と言うたらええか判らんが」

最古の聖徳太子伝

『上宮聖徳法王帝説』

聖徳太子の業績として、十七条憲法・冠位十二階の制定・国史の編纂・遣隋使の派遣等、数々著名なものがあるが、我々仏教徒にとって太子が、もともと身近に感じられのは、仏教を日本に最初に取り入れられた政治家であるということであろう。明治以後、太子の業績についていろいろの疑問が提起されたが、現在までこれらのことは、太子の業績として信じられている。

なぜこのような疑問が起ったかという点、太子は在世当時から特別扱いをうけていたようであり、死後もななく太子の伝記は神話化されてしまい、太子の真の姿を把握することが困難になってしまった。

現在、太子の伝記を伝えるまとまった資料として『日本書記』の推古天皇巻、『上宮聖徳法王帝説』『聖徳太子伝補闕記』『聖徳太子伝暦』等がある。これらの中で『上宮聖徳法王帝説』は、すでに神話化の傾向が見られるが、その成立がもともと早く、しかもかなり信憑性の高い伝記として、太子伝研究の根本史料になっている。

すなわち、『上宮聖徳法王帝説』は、聖徳太子伝の現存最古の記述で、種々の古伝・異聞・旧伝を収めており、また法隆寺薬師像釈迦像の銘文、中宮寺の天寿国曼荼羅繡帳の銘文を記録しているなど、多くの貴重な資料をふくんでいる。

現在知恩院にある『上宮聖徳法王帝説』は、平安末期の法隆寺学問僧相慶が所持していたもので、その書写は平安朝中期を上らないものとされている。いずれにしても最古の書写本であり、貴重なものである。

知恩院の宝物館には、この外にも阿弥陀二十五菩薩来迎図、法然上人行状絵図、大乗炭経等の多数の国宝や重文類が収蔵されており、機会をみて見学されることを勧めたい。

(守高良哲)

浄土宗開宗八百年記念トラクト

『法然上人と浄土宗』

大正大学助教授 宮 林 昭彦 著

B6判 96頁 定価 160円 (千70円)

(200部以上 単価 140円 送料実費)

内 容

第一編 法然上人のあゆみ

1. 法然上人の時代と出家
2. 求道生活
3. 専修念仏の確信
4. 新しい救済
5. 晩年の法然上人

第二編 浄土宗のおしえ

1. 浄土宗を開かれたわけ
2. 末法と人間
3. 万人平等の救い
4. 選択のおしえ
5. 浄土三部経
6. 阿弥陀仏と浄土
7. 浄土宗の真髄

第三編 信徒の心得

1. 浄土宗の年中行事
2. 仏事の手びき

法然上人略年譜・附参考文献

間もなく開宗八百年の聖辰を迎えます。本会ではこの慶祝を期しトラクトを作成いたしました。檀信徒用施本・慶讃法要記念品などとして広くご利用下さい。お申込みはお早目をお願いいたします。